262
(460)

高崎市文化財調査報告書第 262 集

吉井川浅間塚古墳

市道吉井 9297 号他 1 線道路改良工事に伴う発掘調査報告書

2010

高崎市教育委員会

序

平成21年6月1日、高崎市と多野郡吉井町とが合併し、新「高崎市」が誕生いたしました。高崎市は今回を含め三度の合併を経験し、人口37万人、面積460平方キロメートルの市勢となりました。名実ともにさらなる成長をした高崎市は、平成23年に中核市移行を目指しています。

群馬県西毛地区の多くを占めるように拡大した高崎市は、さまざまな自然と歴史を抱く都市となりました。なかでも今回新たに加わった吉井地域は、国指定特別史跡である多胡碑をはじめ、数々の重要な遺跡が知られています。

本書は吉井地域の中心部を望む高台に位置する古墳の発掘調査報告書です。市道拡幅工事に先立つ埋蔵文化財の発掘調査ですが、吉井町との合併後、高崎市教育委員会として初の本発掘調査となりました。

最後に、本遺跡の発掘調査および報告書作成に多大なるご協力をいただいた地元の皆様ならびに関係機関、各諸氏の方々に厚くお礼申し上げます。本書が吉井地域の文化財研究の一助になれば幸いに存じます。

平成22年3月

高崎市教育委員会
教育長　中島雅利

例言

1 本書は市道吉井9297号他1線道路改良工事に伴い実施した「吉井川浅間塚古墳」の発掘調査報告書である。
2 本遺跡は高崎市吉井町吉井川字浅間塚616-2、617、618に所在する。
3 発掘調査および整理は高崎市教育委員会事務局教育部文化財保護課埋蔵文化財担当が行った。
4 発掘調査期間は平成21年12月1日～12月11日、整理作業期間は平成21年12月14日～平成22年3月31日である。
5 調査組織は以下のとおりである。
・事務担当（文化財保護課）
田口一郎　須田奈保子　山田いづみ
・調査、整理担当
滝沢　匡（文化財保護課）
小根澤雪絵（吉井教育課）
6 本書の執筆・編集は滝沢が行った。
7 図版等の作成は主に滝沢が行った。
8 墳丘現況平面測量は（株）測研に委託した。
9 遺構・遺物の写真撮影は滝沢が行った。
10 本遺跡の発掘調査において、表土掘削および埋戻しを（株）井ノ上が実施した。
11 本遺跡の出土遺物・記録類は高崎市教育委員会文化財保護課で保管している。
12 発掘調査にあたり、地元関係者の方々及び延命密院、高崎市吉井支所建設課、吉井福祉センター、吉井教育課にご協力をいただいた。
13 本書への参考図版掲載にあたり、萩原成基氏、群馬県立文書館、高崎市立図書館にご協力をいただいた。
14 発掘調査参加者（五十音順、敬称略）
金田和子　春山忠晴

凡例

1 本書に使用した地図は国土地理院発行1/50000地形図（高崎、富岡）および1/10000高崎市吉井都市計画図である。
2 本書中の座標値は平面直角座標第Ⅸ系国家座標（世界測地系）であり、方位は上記の座標北（G.N.）である。
3 本書中の図版縮尺は、各図に表示している。遺物写真のスケールは統一していない。
4 断面図に付した標高はT.P.を基準とした。
5 土層・遺物の色調及び土壌の注記は、農水省農林水産技術会事務局及び（財）日本色彩研究所監修『新版標準土色帖（1990年版）』を使用した。
6 遺構には次の略号を使用した。
土坑＝SK
7 テフラには次の略号を使用した。
・浅間Aテフラ：As-A、1783年（天明3年）の浅間山噴火に由来。
・浅間板鼻黄色テフラ：As-YP、BP13000～14000の浅間山噴火に由来。

目次

序
例言・凡例・目次
1．調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・1
2．遺跡の立地と環境・・・・・・・・・・・・・1
3．発掘調査の方法と経過・・・・・・・・・・9
4．調査の内容・・・・・・・・・・・・・・・・10
5．まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
写真図版
報告書抄録

1．調査に至る経緯

平成21年、旧吉井町で町道下原・浅間塚線（旧名称）拡幅工事が計画された。予定地が古墳墳丘を含む周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、旧吉井町建設課より旧吉井町教育委員会生涯学習課に確認調査の依頼があった。

平成21年6月1日の高崎市との合併後、担当課は高崎市吉井支所建設課（以下工事担当課）と高崎市教育委員会事務局教育部文化財保護課（以下市教委）に移った。同年7月13日には文化財保護法第94条の通知が提出され、市教委は同年7月21日に確認調査を実施、古墳に伴うとされる埴輪片が少量出土した。

試掘結果を受け、工事担当課と埋蔵文化財保護の協議を行ったが、古墳墳丘を削平する部分を含め、工事による埋蔵文化財への影響は不可避とのことであり、記録保存の発掘調査を実施した。

2．遺跡の立地と環境

・遺跡の立地

本遺跡は利根川水系の一つである鏑川が東西に開析した谷に位置する。この谷では河岸段丘が上位・下位と二段にわたり発達しており、その右岸（南岸）の段丘では、鏑川とは垂直方向に南から北に向かって幾筋もの小河川が流れ、上位段丘を舌状台地として侵食している。

遺跡はそのうち大沢川と西谷川とが形成した台地の上位段丘西端に位置し、そこは鏑川によって開けた谷が一望できる高台である。さらに本遺跡の東約600mも谷が形成されている。

・周辺の歴史的環境

鏑川流域では旧石器時代から近世まで遺跡が存在するが、ここでは主に本遺跡と関連が深い古墳時代を概観する。当地の古墳時代については右島和夫の記述（右島1992）に詳しく、以降もこれに依拠して述べる。

鏑川流域の前期古墳は富岡市北山茶臼山古墳、北山茶臼山西古墳があり、いずれも比較的小規模である。右島はこの地域が弥生中期以降の伝統的地域であること、谷間の地形なので強大な勢力が発達する基盤に欠けていたことを根拠に、鏑川流域の前期古墳について「今後、新たに追加されるものがあるとしても、これらの規模を大きく出るものはないと推測される。また、追加される場合（旧）吉井町から藤岡市西部にかけての地域での発見が有力」と指摘している。

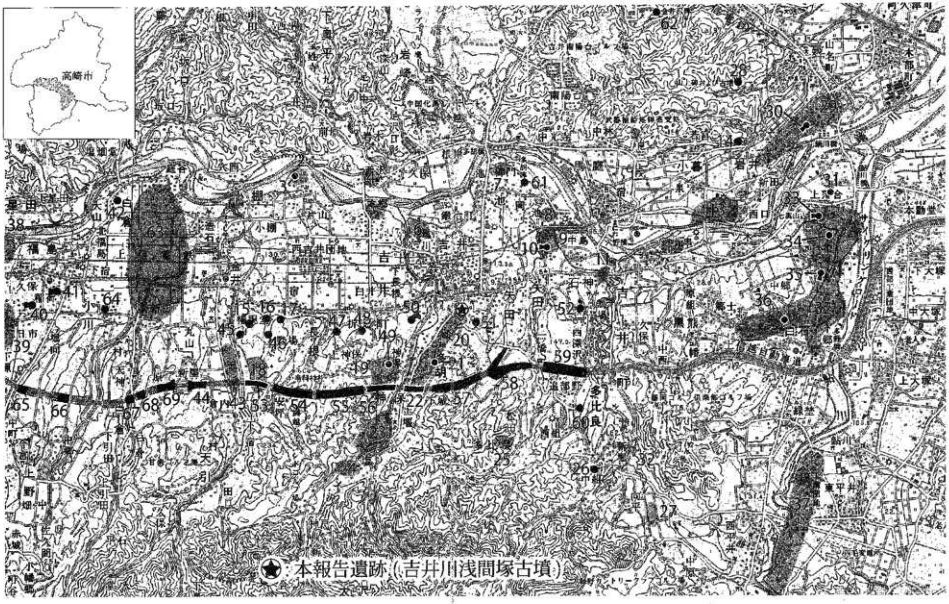
中期になると、5世紀中葉までに各地に古墳が造られた。甘楽地域には全長80mの前方後円墳である天王塚古墳、吉井地域には恩行寺裏山古墳、片山遺跡1号墳、吉井町53号墳、下流の藤岡地域には全長145mの前方後円墳である白石稲荷山古墳がある。白石稲荷山古墳はその大きさ・多量の副葬品で他の古墳より抜きん出ており、その周囲だけでなく鏑川流域全体にも影響力を持っていたことが推測される。いずれも粘土槨・礫槨等の竪穴系主体部を有している。吉井地域の当該期古墳のうち恩行寺裏山古墳、吉井町53号墳は本報告中の吉井川浅間塚古墳と似た立地をしており、鏑川南岸の上位段丘先端に位置する。

5世紀後半の群馬県西部の特徴として、舟形石棺の分布がある。これは鏑川流域にも及んでおり、甘楽地域の大山鬼塚古墳、狐塚古墳、島田氏宅所在石棺、藤岡地域の宗永寺裏東塚古墳が該当する。舟形石棺の分布は各小地域間を広域に政治的に結びつける構造の成立を示すものとされる。（右島1990）

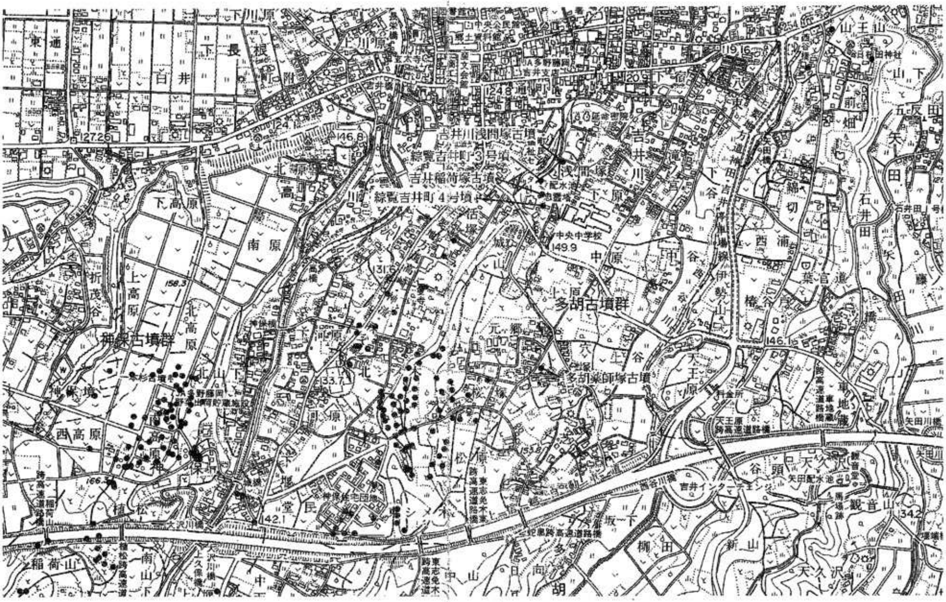
なお白石古墳群には、鏑川流域では最大の全長145mを誇る七輿山古墳があるが、5世紀後半から6世紀前半の築造が推定されている。5世紀中葉から末葉まで、前方後円墳は鏑川流域では白石稲荷山古墳と七輿山古墳の2基のみであり、これが属する白石古墳群の勢力が流域全体に影響力を及ぼしていたことが指摘されている。

この地域では初期群集墳も確認されており、富岡市下高瀬上之原遺跡の円墳7基や神保下條遺跡4・5号墳が挙げられる。いずれも竪穴系の主体部を持つ小型円墳と考えられる。

6世紀になると流域全体に群集墳が多く出現する。横穴式石室を主体部として持つが、特に鏑川南岸の古墳群



第１図　周辺の地形と遺跡　S=1/50000



第2図　周辺の古墳・古墳群　S=1/10000（右島1992、茂木1995を元に作成）

第1表　周辺遺跡一覧

古墳・古墳群・横穴墓

No	遺跡名	概要
1	小柳古墳群	9基確認。
2	片山古墳群	後期群集墳。総覧では7基。
3	片山1号墳	中期前期古墳の粘土槨調査。鋼鏡、石製模造品出土。
4	岩崎古墳群	後期群集墳、総覧では6基。
5	本郷古墳群	後期群集墳、総覧では21基
6	塩川（北原）古墳群	前方後円墳1基を含む古墳群。他7基。
7	下地古墳群	後期群集墳。20基を確認。
8	高木古墳群	後期群集墳。7基を確認。
9	塚原古墳群	後期群集墳。46基を確認。
10	吉井町152号古墳（二子塚）	前方後円墳。横穴式石室と思われるが、削平。
11	祝神（石神）古墳群	後期群集墳。総覧では11基。
12	東寺井（小田）古墳群	後期群集墳。多数あったが現存は数基。
13	西浦古墳群	11基確認。
14	小粟の穴薬師	凝灰岩製を謝り込む横穴墓。
15	中原Ⅱ遺跡	後期古墳。形象埴輪州が復元可能。
16	吉井町53号墳	竪穴系主体部。
17	堀行寺裏山古墳	中期古墳。径40mの円墳。
18	安岸古墳群	後期群集墳。総覧では44基。長根安坪遺跡で新たに10基確認。
19	神保古墳群	後期群集墳。上毛古墳総覧では63基。
20	多胡古墳群	後期群集墳。総覧では91基。
21	多胡黒薬塚古墳	径約25mの終末期古墳。載石切組積石室に牛伏砂岩使用。
22	神保下鎌遺跡	後期古墳2基。形象埴輪普窓に出土。古墳前期住居より銅鏡出土。
23	塩Ⅰ古墳群	後期群集墳。13基を確認。
24	塩Ⅱ古墳群	後期群集墳。総覧では12基。
25	山ノ神古墳群	後期群集墳。総覧では7基。
26	多比良鹿助前古墳	牛伏砂岩の載石切組構石室。円墳だが削平。
27	中ノ原古墳群	後期群集墳。総覧では10基。
28	山ノ上碑及び古墳	天武天皇9年（681年）の追善供養碑と載石切組横石室の古墳。
29	山名古墳群	後期前方後円墳と群集墳。
30	山名伊勢塚古墳	全長75mの前方後円墳。横穴式石室で6世紀後半。
31	伊勢塚古墳	結晶片岩と牛伏砂岩の横穴式石室。胴張りと壁面の持ち送りが特徴。径30mの円墳で6世紀末。埴輪が出土。
32	山石古墳群	中期、後期の大型前方後円墳。後期大群集墳。終末期古墳。
33	七興山古墳	後期初頭の大型前方後円墳で全長145m。三重の周濠の可能性。中堤上に形象埴輪を含む埴輪列。東にある宗永寺裏東塚古墳からは舟形石棺が出土。
34	皇子塚古墳	径30mの後期大型円墳。凝灰岩の切組石室。墳頂入刀、多量の埴輪が出土。北側に同期横穴の平井1号墳がある。
35	白石稲荷山古墳	中期の入型前方後円墳。全長140m以上。後円部の墓際から石製模造品等の副葬品。墳頂部には家・短甲形埴輪。
36	寅蔵塚古墳	凝灰岩と牛伏砂岩の載石切組構石室。白石古墳群最新段階の終末期円墳。
37	東平井古墳群	後期大型群集墳。結晶片岩と牛伏砂岩の横穴式石室で胴張りを有する。
38	塚原古墳群	20基ほどの円墳。7世紀代。
39	二日市古墳群	後期群集墳。現存20基程。

No	遺跡名	概要
40	笹倉稲荷古墳	全長100mの甘楽地方最大の前方後円墳。6世紀後半で両袖型横穴式石室。西にある路塚古墳からは舟形石棺が出土。近隣の為田家にも舟形石棺が保管。
41	天王塚古墳	前期末～中期初頭とされる前方後円墳。
42	大山鬼塚古墳	5世紀後半の円墳。舟形石棺を伴い石製模造品、鹿具が出土。
43	口明塚古墳群	後期群集墳。総覧で5基。
44	天引狐崎遺跡	前期方形周溝墓。後期古墳2基。

集落・その他の遺跡

45	西原遺跡・Ⅱ遺跡	古墳後期集落。後期古墳3基。
46	西原脇・長根宿遺跡	古墳前期集落。
47	折茂Ⅱ遺跡	古墳時代後期集落。
48	折茂東遺跡	弥生後期集落、方形周溝墓。古墳前～後期、平安集落。
49	青梅原Ⅳ遺跡	弥生後期周溝墓。古墳前期集落。神保古墳群調査。
50	南原遺跡	古墳前期集落。
51	川内遺跡	弥生後期前集墓群、方形周溝墓群。
52	入野遺跡	古墳前・後期集落。
53	長根安坪遺跡	古墳後期集落。安坪古墳群調査。
54	長根羽出倉遺跡	古墳前期～平安集落。古墳後期の祭祀遺構より須石製模造品。
55	神保富士塚遺跡	古墳前・後期～平安集落
56	神保植松遺跡	弥生～平安集落および方形周溝墓。神保古墳群調査。
57	多胡鎧黒遺跡	古墳後期～平安集落。
58	矢田遺跡	古墳後期～平安集落。矢田郷に想定。
59	多比良遺跡野遺跡	古墳中期～平安集落。
60	東沢遺跡	古墳後期～平安集落。
61	多胡碑	和銅4年（711年）多胡郡設置記念碑。
62	金井沢碑	神亀3年（726年）の供養碑。
63	甘楽条里遺跡	古墳前期水田跡。古墳後期の須石製模造品1点。
64	恒遺跡	弥生後期～古墳後期集落。
65	西原遺跡	古墳前期～平安集落。
66	松葉慈学寺遺跡	古墳前期～奈良集落。
67	天神Ⅱ遺跡	古墳後期集落。
68	天神Ⅰ遺跡	古墳後期集落。
69	白倉下原遺跡	古墳初期方形周溝墓、前期～平安集落。

においては、その使用石材の特徴として天井石に牛伏砂岩、壁石に結晶片岩を用いることが指摘されている（右島ほか 1991）。この時期の前方後円墳として、甘楽町の笹森稲荷古墳が最も大きく全長約 100m である。また、高崎市の山名古墳群には全長約 75m の山名伊勢塚古墳がある。その他、吉井地域の塚原古墳群内にある二子塚古墳（吉井 152 号墳）のように、全長 30 ～ 40m の小規模前方後円墳が群集墳に伴うケースが多くあり、『上毛古墳綜覧』（以下、綜覧と略す）には多胡古墳群や神保古墳群にも前方後円墳が伴うとされている。これについて右島は「各小地域の経済基盤の強化による中小首長層の成長を裏付けるもの」と指摘している。

7 世紀になると、群馬県地域では前方後円墳は造られなくなり、変わって首長層の古墳には石室材を丹念に加工する裁石切組積石室が用いられる。鏑川流域では吉井地域の多胡薬師塚古墳、多比良諏訪前古墳、藤岡市白石古墳群内の喜蔵塚古墳等がある。この時期も各群集墳では古墳の築造が続けられるが、6 世紀代と異なり埴輪を伴わなくなる。

古墳以外の墓では、吉井地域に横穴墓が 2 ヶ所確認されている。鏑川北岸の「木暮の穴薬師」横穴墓群と吉井地域北部の岩野谷丘陵に位置する「穴大黒」であるが、いずれも岩野谷丘陵の凝灰岩脈に掘り込んである。群馬県地域は横穴墓が少ない地域であり、これらを含め 8 ヶ所を知るのみである。

なお、今回報告する古墳は従来「浅間塚」と呼ばれ、綜覧においては「吉井町 2 号墳」とされていたが、今回の調査では大字名を冠して「吉井川浅間塚古墳」と呼称した。

・吉井稲荷塚古墳（綜覧吉井町 4 号墳）について

本書で報告する吉井川浅間塚古墳は、前述のように南北に長く広がる多胡古墳群の北端に位置するが、本古墳を含め 4 基の古墳が支群状にまとまっており、現在、本古墳以外はすべて削平されている。このうち吉井稲荷塚古墳（以下、稲荷塚と略す）については 1943 年（昭和 18 年）萩原 進により発掘調査が行われている。これは戦時中にもかかわらず、削平される古墳に対して実施された貴重な記録保存の調査である。その内容については萩原の著作『群馬県古墳の研究』（1948 年発行、以下、萩原報告と略す）に報告されている。稲荷塚は本報告古墳と至近であり数少ない調査例であるため、ここでその概要を紹介したい。

萩原報告では昭和の大合併以前の吉井町（現在の吉井町吉井、吉井川、長根、下長根、片山、小棚、本郷、塩川、池、矢田）に所在する古墳群を総称して吉井古墳群と呼ぶ。本古墳を含めた 5 基の古墳を第二区域、これより南の多胡古墳群および神保古墳群を第一区域、吉井地域市街地が位置する下位段丘周辺のいくつかの古墳群をまとめて第三区域と分類している。第二区域には稲荷塚、浅間塚のほか、綜覧吉井町 3 号墳、綜覧吉井町 5 号墳があり、および綜覧吉井町 1 号墳である多胡薬師塚古墳を含めているようである（註 1）。萩原報告ではそのほか「地面が明らかに墳丘のおもかげを殘してゐる」とし、他の古墳が存在する可能性を指摘している。

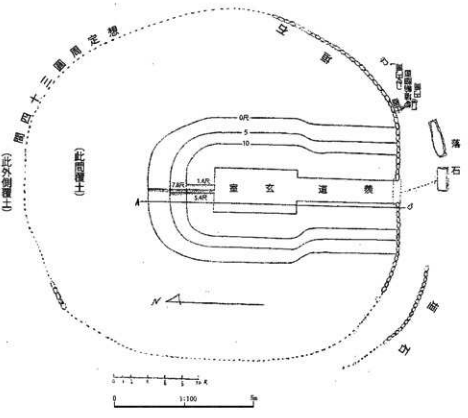
さて、稲荷塚は現在の吉井福祉センター敷地内にある忠霊塔の場所に位置していた。この忠霊塔建設が、墳丘の調査と削平の原因である。記録保存であったため、当時としては大変稀な墳丘の周囲から主体部、墳丘基礎と解体してゆく方法が採られた。

墳丘規模・構造　　墳丘の規模は調査当時で径 22.12m(73 尺)、高さ 5.45m(18 尺) で、円墳である。周囲に葺石が用いられ、掲載の平面図から 2 段築造であると思われる。

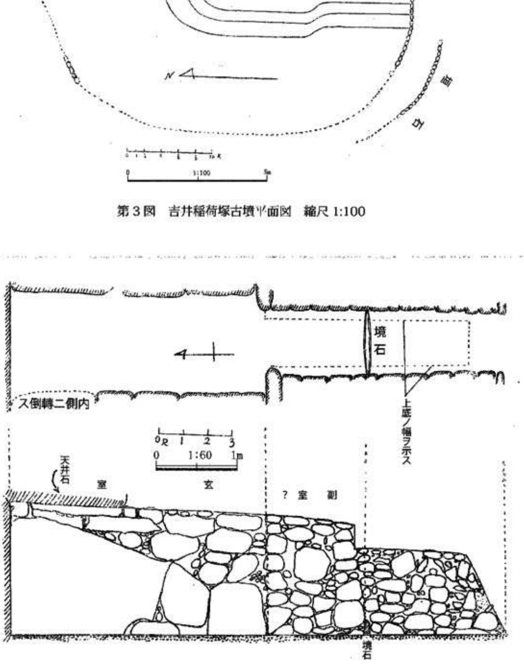
埴輪　　石室入口より人物埴輪頭部、円筒埴輪 3 点が出土した。そのほか人物埴輪の美豆良や女子顔面破片等が出土している。

主体部　　両袖型の横穴式石室であり、全長約 6.06m(20 尺)、内訳は羨道約 2.73m(9 尺)、玄室部約 3.33m(11 尺) を測る。入口底面幅は約 0.85m(2.8 尺)、羨道部の奥の幅は約 1.0m(3.3 尺) で、羨道部天井幅は入口、奥ともに約 0.61m(2 尺) である。玄室幅の計測個所は不明だが約 1.82m(6 尺) との記述である。天井石は最奥部の自然石の 1 石が残存し、平面図には崩落した他の天井石様の石が石室入口に記されている。側壁上端はほぼ崩れずに残り、天井高は入口から奥壁に向かって徐々に高くなっている。奥壁は一枚の巨石のみで構築され、玄室腰石には大振りの石を用い、特に右壁奥には天井石より大きい幅約 2 m の巨石が使用されている。床面は玉石が敷かれており、入口より約 1.76m(5 尺 8 寸) の羨道底面に高さ約 20cm の仕切石（萩原報告では「境石」）がある。石室に使用された石はいずれも自然石であるが種類は不明である。

石室天井部および壁面背後の構造については、今回の調査が墳丘外側から解体してゆく方法であったので、裏



第３図　吉井稲荷塚古墳平面図　縮尺 1:100



第４図　吉井稲荷塚古墳石室平面図及び立面図　縮尺 1:60

込めの確認とそれを葺石状に覆う控え積み (註 2) の検出が行えた。裏込めには川原砂が主体として使われていたと報告している。控え積みの外側は「粘土層で覆ひ、厚い所は三寸から四寸 (約 9 ～ 12cm) ほどの厚みをなしてゐた」とある。

副葬品　　玄室奥をA区、中央部をB区、玄門付近をC区とわけて報告している。A区の東側には扁平な石が2つ並んでおり、朱が付着していた。そのうち奥の石の上には耳環 1 対と歯が残されていた。手前の石の南側には骨があった。そのほか奥壁に沿って大刀が 2 振と鉄鏃が出土した。中心よりも西側では耳環 1 対と歯が出土した。B区では左壁沿ってに大刀が二振と頭蓋骨が二体分残存していた。そのほか耳環 1 対と歯、ド半身の骨が出土した。C区では右壁付近に耳環 1 対と歯が、左壁袖部隅に多量の鉄鏃と鉾身が出土した。土器は出土位置の記載は無いが上師器甕 (坏?)、須恵器高坏、長頸壺、坩の出土が記されている。調査当時の新聞記事に掲載された写真 (昭和 18 年 5 月 21 日付毎日新聞) には須恵器甕口縁部や小形甕が写っている。

上記の発掘調査の成果から、稲荷塚古墳は多胡古墳群内の他の古墳と同様に 6 世紀代の築造と推定できる。なお、出土遺物は吉井小学校に保管されていたが、火災に遭い焼失してしまったという。

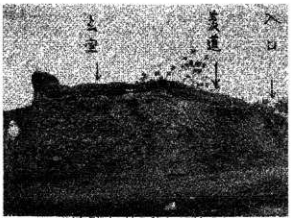
註 1　絲覧には 3 号墳が径 13.33 m (44 尺) で石槨 (横穴式石室のことか?) と円筒埴輪を伴い、5 号墳が径約 10 m (33 尺) で円筒埴輪を伴うとの記述がある。

註 2　右島和夫はこの構造を「裏込め被覆」と呼び、「石室壁体背後の裏込めが崩落しないように、その周囲を石垣状 (葺石状) にさらに補強するもので機能的には裏込め構造の一部と見なすことができる。古墳によって、あるいは地域によってこれを欠くものも存在する。」「利根川以西にあたる群馬県西部地域ではこの裏込め被覆の構造が一般的である。」としている。(右島 1988、2003)

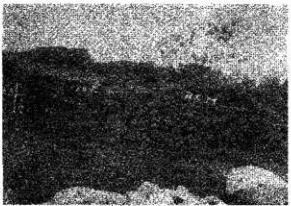
第 5 図　吉井稲荷塚古墳石室内遺物出土位置図 (縮尺 1:30)

※吉井稲荷塚古墳の図は、すべて萩原 進「群馬縣古墳の研究」より転載・加工した。

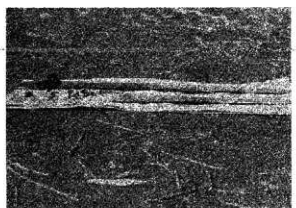
石室裏側の控え積み（北から）

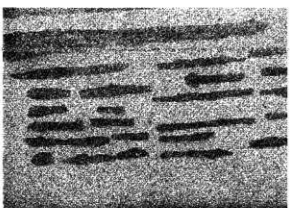


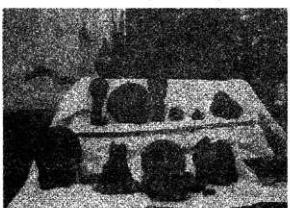
石室側面の控え積み（西から）

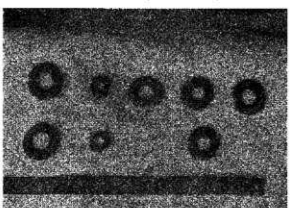

石室側壁（西から）

石室入口と控え積み（南から）


石室内出土品（大刀・耳環）


石室内出土品（鉄鉾・鉄鏃）


古墳出土品（土器類）


石室内出土品（耳環）

吉井稲荷山古墳発掘調査状況および出土遺物写真（萩原 進「群馬県古墳の研究」より転載）

3．発掘調査の方法と経過

・調査の方法

発掘調査に先立ち、地権者の同意を得て下草刈りを行い、墳丘の現況測量と調査前の写真記録を実施した。

発掘調査は道路拡幅部分のうち、確認調査によって谷地形になると判明した東側を除いて、墳丘が削平される部分と古墳関連遺構が残るだろう場所について実施した。最初、墳丘裾部の確認調査未実施の場所を人力で掘削し、確認面（ローム層）までの深さを把握した。その後重機にて表土を掘削し、人力で遺構の精査を行った。

調査区は東西に細長いが座標軸と比べて傾くため、調査区西に任意の原点を設定し、東に 28.95 度傾くグリッドを設定した。調査区の平面および断面測量は縮尺 1/20 で作成し、写真撮影には 35mm モノクロとカラーリバーサルフィルムを用い、デジタルカメラも併用した。

・調査の経過（調査日誌より抜粋）

11 月 24 日	墳丘下草刈り。
26 日	墳丘現況測量実施。
12 月 1 日	器材搬入。掘削開始。
4 日	重機による表土掘削。遺構精査開始。
7 日	測量記録開始。
8 日	調査区全体写真撮影。
11 日	調査終了。調査区埋め戻し。器材撤収。

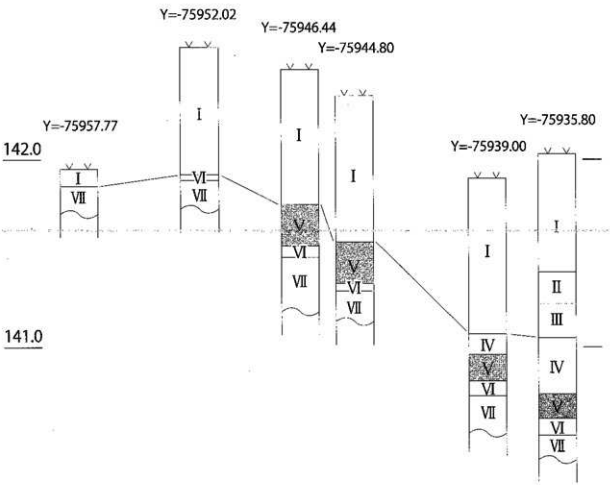
調査前の古井川浅間塚古墳（東から）

4．調査の内容

・基本層序

墳丘崩落土および現況道路築造時の撹乱を Ⅰ 層とし、Ⅱ 層以下がローム層である。Ⅴ 層は肉眼による観察により As-YP 層とした。

前述のとおり、本遺跡は舌状台地の西端に位置し周囲よりも標高の高い場所にある。そのため土壌の堆積が顕著ではなく、墳丘築造以前の表土は大変薄くすぐにローム層に達したと推定できる。墳丘をふくめての表土は道路築造によって大部分を削平されている。また現地形は東に向って低くなっており、これと同様にローム層も東に向かうほど低い位置で検出した。調査区以東で実施した確認調査では谷地形を埋没させたと思われる厚い黒色土層が見られ、ローム層の検出までは至らなかった。



Ⅰ：墳丘崩落土もしくは撹乱

Ⅱ：10YR5/6　黄褐色土。よく締まる。

Ⅲ：10YR5/8　黄褐色土。よく締まる。径 5mm 白色パミス微量。As-YP 微量。

Ⅳ：10YR5/8　黄褐色土。よく締まる。径 5mm 白色パミス微量。
　As-YP 層ブロック（径 5cm）を少量含む。

Ⅴ：As-YP 層

Ⅵ：10YR6/6　明黄褐色土。よく締まる。径 1 ～ 2mm 白色パミス多量。

Ⅶ：10YR7/2　にぶい黄橙粘土。黒色土（植物もしくは鉄分）を多量に含む。

第 6 図　基本層序　（縮尺 1:20）

・調査区の状況および検出された遺構

調査区の全長は南壁で 28.27m を測る。以下の記述は調査区を墳丘部、墳丘裾部、平坦部と分けておこなう。

墳丘部 (Y=-75960 ～ -75945 付近)　　調査前は墳丘盛土が残っていると予想していたが、南側壁面観察の結果、現況道路部分より上層ではビニールなどを含むゆるい土 (2 層) が堆積しており、すべて墳丘崩落土であった。その直下の 18 層は砂利層であり、現況道路面とレベルがほぼ一致する。道路築造時の整地面と考えられ、道路築造当初は本調査区まで路線が広がっていたようである。最下層の 19 層は一部板状構造をなし道路の基礎部分と推定するが、近現代の遺物が出土しなかったので墳丘盛土の可能性も完全に否定できない。

墳丘裾部 (Y=-75945 ～ -75943 付近)　　いくつかの堀込みがあるが、掘削時には個々に識別できず、出土遺物も近現代のものがほとんどであった。完掘後、断面と地山への堀込みの形状から遺構を復元した。

SK1　北壁断面で検出幅 70cm、深さ 28cm を測る。As-A 軽石を含むことから近世以降の土坑である。

SK2　北壁断面で検出幅 3m8cm、深さ 38cm、南側断面で検出幅 2m14cm、深さ 36cm を測る。底面の 12 層は As-A 軽石を多量に含んでおり墳丘の裾に位置することから、平坦面の軽石を集めた処理坑の可能性もある。上層の 6' 及び 7 層は別の遺構になる可能性もある。

SK3　北側断面で検出幅 1m76cm、深さ 28cm、南側壁面で 1m86cm、深さ 20cm を測る。時期を決定できるような遺物やテフラを確認できなかった。古墳に関連する遺構の可能性も否定できない。

平坦部 (Y=-75943 ～ -75933 付近)　　西端で遺構の可能性がある覆土 (SK4) を確認したほかは、確認調査の結果同様、攪乱が広がっていた。一部攪乱を除去しローム層上面まで確認したが、おおむね平坦であり遺構は確認できなかった。

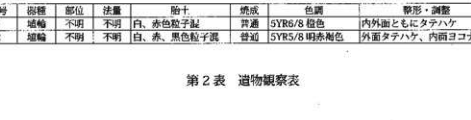
SK4　北壁断面で検出幅 1.44m、深さ 34cm を測る。覆土に As-A 軽石を含むため、近世以降の土坑と推定する。

・現存する墳丘

発掘調査前に墳丘の現況測量を実施した。残存状況は目視してもわかるが極めて悪く、南側のみが墳丘原型をとどめていると推定できる。北側に至っては墳丘の半分以上が削平されていた (写真図版参照)。特徴的なのは墳丘南側に隣接する周囲より一段高い部分である。大きさは土壇で東西 14.2m、南北 5.1m を測る。東西に長い方形を呈するが、墳丘との位置関係が不規則であり、周囲は削平され本来はもっと大きかったと考えられる。墳丘測量の際にこの方形部分を含めて除草作業を行い、その際に葺石の確認や遺物の採集を試みたが発見できなかった。

・出土した遺物

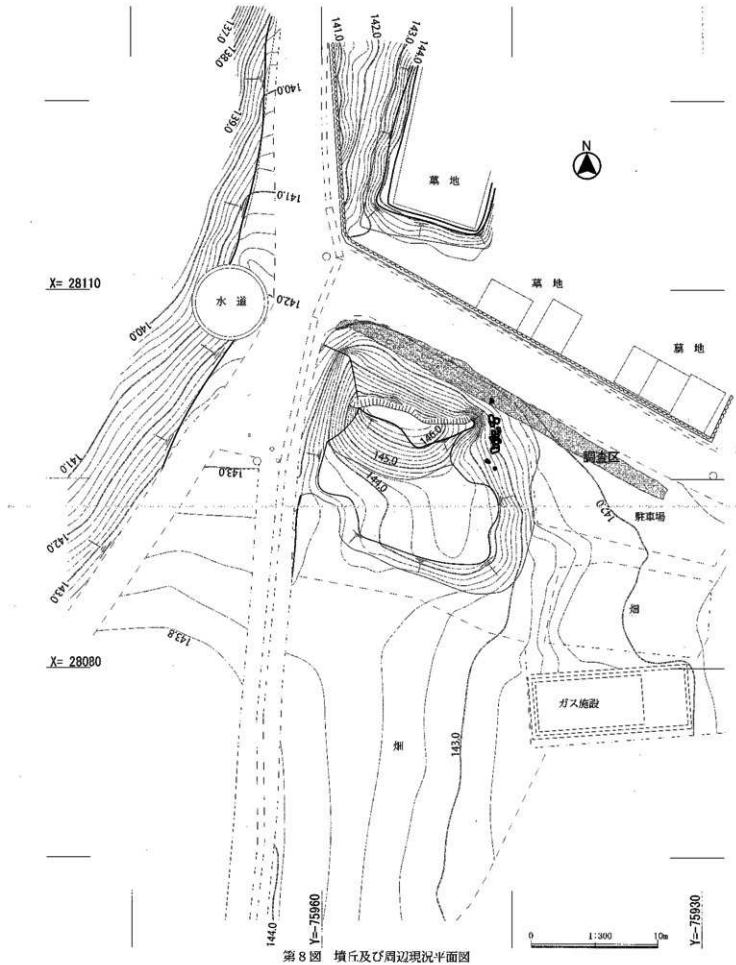
墳丘裾部からの出土が多かったが、そのほとんどが近現代の遺物であり、この場所の性格がゴミを遺棄する場であったことを示している。古墳時代に属する遺物として埴輪片が 2 点出土したが、いずれも小片である。確認調査でも埴輪は小片が 1 点のみの出土であり、これらは数量的にも本古墳に伴うものとは考えにくい。



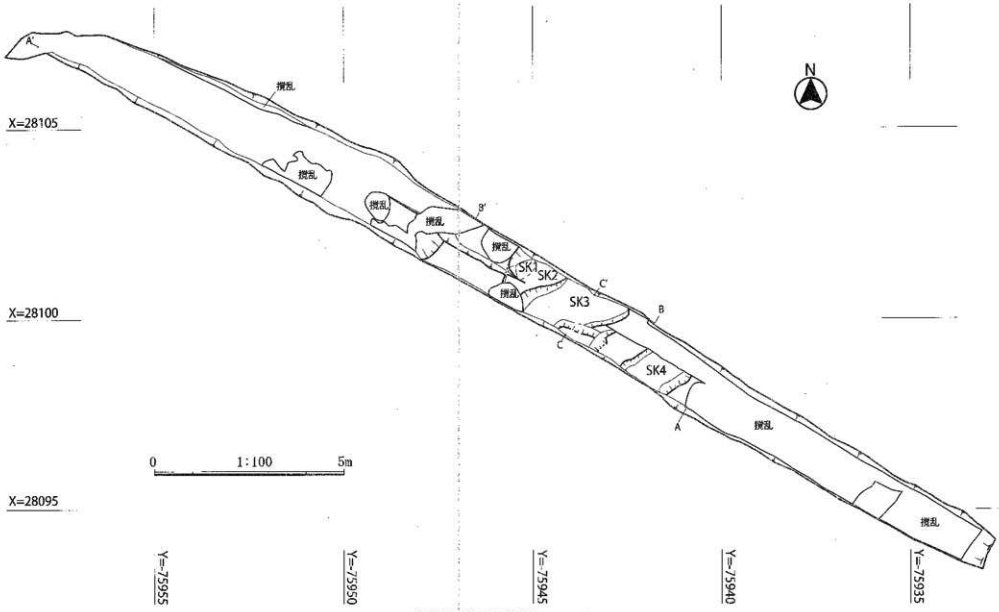
第 7 図　遺物実測図

番号	器種	部位	法量	胎土	焼成	色調	整形・調整
1	埴輪	不明	不明	白、赤色粒子混	普通	5YR6/8 橙色	内外面ともにタテハケ
2	埴輪	不明	不明	白、赤、黒色粒子混	普通	5YR5/8 明赤褐色	外面タテハケ、内面ヨコナデ

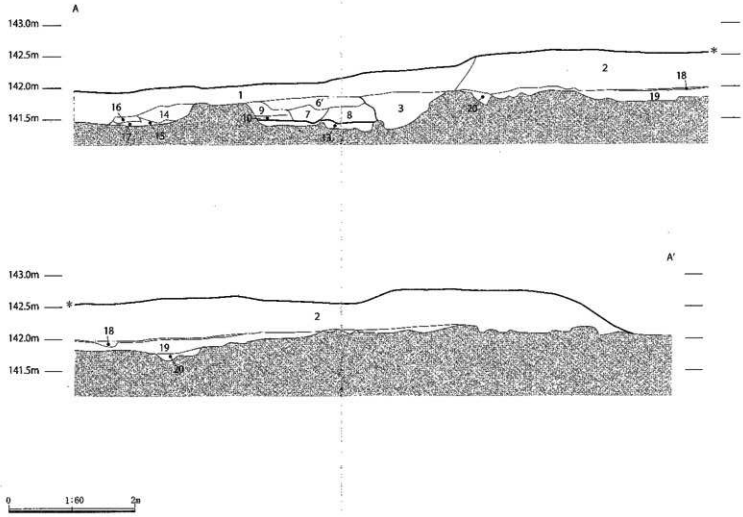
第 2 表　遺物観察表



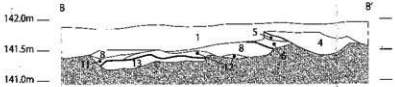
第８図　墳丘及び周辺現況平面図


A'
撹乱
X=28105
撹乱
撹乱
撹乱
B'
撹乱
SK1
SK2
撹乱
SK3
C'
B
X=28100
C
SK4
A
撹乱
0
1:100
5m
X=28095
撹乱
Y=-75955
Y=-75950
Y=-75945
Y=-75940
Y=-75935
N

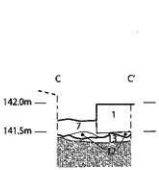
第９図　調査区平面図



第10図　調査区南壁土層断面図



第 11 図　調査区北壁土層断面図



第 12 図　調査区中央部 (SPC-C') 土層断面図

土層注記　(各断面同共通)

1　表土。駐車場整地用土及び攪乱。

2　古墳部分表土。墳丘の崩落による堆積。

3　攪乱。ゴミ穴と思われる。

4　10YR4/6 褐色壌土。よくしまる。径 3 ～ 6mmAs-A 軽石及び径 1 ～ 10mmAs-YP 軽石少量含む。近現代の攪乱。

5　10YR5/6 黄褐色ローム。6 層中の大きいブロックの可能性あり。SK1。

6　10YR3/4 ～ 4/4 暗褐～褐色砂壌土。よくしまる。径 1 ～ 5mmAs-A 軽石 1 少量。

6'　6 に径 5mmAs-YP 軽石少量含む。

7　10YR3/3 暗褐色壌土。ややしまる。径 1 ～ 3mmAs-A 軽石微量。径 1 ～ 10mm ローム粒子少量。SK2。

8　10YR4/6 ～ 5/6 褐～黄褐色壌土。ややしまる。径 5mmAs-A 軽石少量。
径 5mm ～ 3cm ロームブロックおよび As-YP 層ブロック少量。
根による黒色土含む。SK2。

9　10YR3/3 暗褐色壌土。ややしまる。径 1 ～ 3mmAs-A 軽石微量。径約 3mm ローム粒子微量。SK2。

10　9 層に径約 5mmAs-YP 層ブロック大量に含む。SK2。

11　10YR3/4 暗褐色壌土。ややゆるい。As-A 軽石微量。SK2。

12　10YR3/4 暗褐色壌土。ゆるい。径 1 ～ 3mmAs-A 軽石多量。SK2。

13　10YR5/8 黄褐色壌土。ややゆるい。径 1 ～ 3mmAs-YP 多量。SK3。

14　9 層と同様だが、連続性は確認できない。径 5mm ～ 5cm ロームブロック微量。SK4。

15　10YR5/6 黄褐色ロームを主体とする。As-A 軽石微量。SK4。

16　10YR3/4 暗褐色壌土。ややしまる。径約 1cm ロームブロック微量。SK4。

17　16 層に径約 3cm のロームブロック及び黒色土ブロック多量に含む。よくしまる。SK4。

18　径 1 ～ 3mm の円礫及び角礫層。川砂か？ある時期の道路整地に利用したものの可能性あり。

19　10YR6/6 明黄褐色ロームと 10YR3/4 暗褐色壌土との混土層。
一部が中～極厚の板状構造をとるが、その他は暗褐色土中に径 1 ～ 5mm ロームブロックが 50%入る構造。

20　根による攪乱。ロームに粘土塊多く入る。ややゆるい。

5．まとめ

今回の発掘調査において、吉井川浅間塚古墳について得られる情報は大変希薄であったが、周辺の観察によって得られたことから若干の考察を加えたい。

現況測量調査の結果から、墳丘は北側のほぼ半分を削平されている可能性が高いことが指摘できる。墳丘北側範囲がどこまで及ぶかの参考とするため、現況測量図に地籍図を重ねてみた（第13図）。現況の道路は北西の崖から南東方向に直線的に延びているが、地籍図では墳丘の位置で道が北に張り出しているのがわかる。この地割は、明治9～10年に作成された『社寺境内外区別取調地図』（第14図）（註）にも同様の形状で描かれており、より古い地割と言える。もし、これが墳丘の旧状をある程度表現しているものと仮定すれば、墳丘の南北長は15m前後と推定できる。墳形は円墳であろうが、南側に取り付く高まりも気になる点である。一方、本古墳より南200mの位置には中世の多胡館が立地する。ここで指摘した地割の屈曲は中世城郭に起因する可能性も挙げておく。

調査を実施し、気になったことが2点ある。1つは調査区および周辺に埴輪が全くと言ってよいほど見つからなかったことである。その総数は今回の調査で小片が2点、確認調査でも1点のみである。墳丘および周囲も注意して見たが、散布は確認できなかった。一方、第2章で紹介した吉井稲荷塚古墳では一定の埴輪が出土し、6世紀代の当地域の古墳で一般的な様相を示している。当然、本報告の古墳も埴輪の出土を予想したが、今回の所見では古墳に埴輪が伴わなかったことも考えられる。

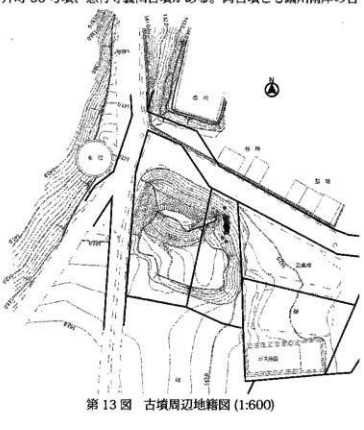
第2に石材の散布があまりにも少ないことである。本古墳の南に広がる多胡古墳群を始め吉井地区の後期群集墳は横穴式石室を主体部に持ち、吉井稲荷塚古墳も同様である。本古墳も横穴式石室を持つことを予想したが、墳丘の半分を削平されているにも関わらずその痕跡を見ることができない。石材が抜き取られている可能性もあるが、すぐ北側の墓地に伴う石垣にも石室に使用するような大ぶりな石材を転用している様子は無い。墓地を所有する延命寺院の住職からも、昔から周囲にそのような大きな石は無かったとの話を伺った。以上のことから横穴式石室の存在を積極的に示す根拠は見つかっていない。

墳丘部東側裾部には最大60cm程度の石材が南北に並んでいたが、数は多くなくすべて表土の上にあった。後世に土留めの石として使用されていたようであるが、古墳に使用された石かは不明である。

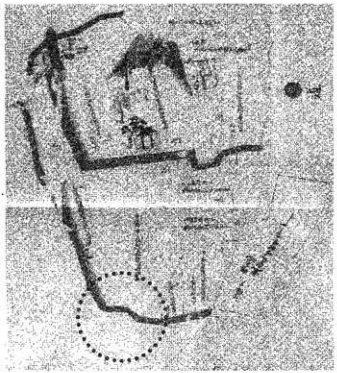
本古墳に近い竪穴系の主体部を持つ古墳は吉井町53号墳、恩行寺裏山古墳がある。両古墳とも鏑川南岸の舌状台地先端に位置し、本古墳と立地が似ている。その他竪穴系の可能性を指摘されているものに神保下條遺跡3号墳、4号墳がある（右島1992）。

このような少ない根拠からあえて踏み込んで指摘するならば、本古墳は竪穴系の主体部を持ち、豊富な埴輪を伴う以前の時期にあたる可能性も否定できない。

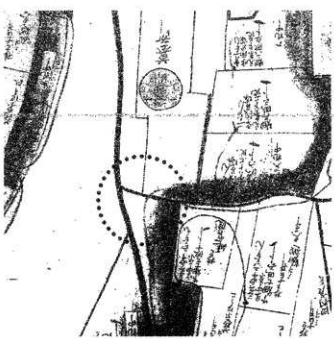
註　明治4年太政官布告の社寺領上知令にともなって作成された地図で、このうち今回転載した地図は「多胡郡、旧絵三大区・旧絵四大区　第壱番　延命院」である。これとは別に明治7年から始められた地租改正にともなって作成された『工申地券地引絵図』（第15図）を見ると、当該地の表現は簡略化されているように見える。両絵図とも明治初年に土地の把握という同様の目的で作られたものであるので、同じ時期の地割を表していると考える。『社寺境内外区別取調地図』のほうがより局所的に描かれているので、当時の地割をより正確に表しているだろう。なお、両絵図とも群馬県立文書館が所蔵している。



第13図　古墳周辺地籍図（1:600）



第 14 図 『社寺境内外区別取調絵図』(部分)
(点線内が本古墳周辺)



第 15 図 『壬申地引絵図』(部分)
(点線内が本古墳周辺)

参考文献

大沢末男 1974「第 2 部歴史篇　原始から古代へ」『吉井町誌』吉井町誌編さん委員会

萩原　進 1948『群馬縣古墳の研究』文進社

右島和夫 1988「Ⅲ　古墳時代の遺構と遺物」『田篠上平遺跡』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団

右島和夫 1990「古墳から見た五・六世紀の上野地域」『古代文化』42-7

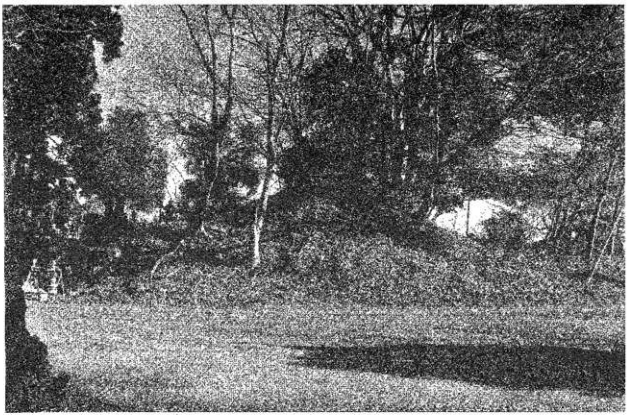
右島和夫・津金沢吉茂・南雲芳昭・小林徹・井上昌美・磯貝朗子 1991「牛伏砂岩使用古墳の研究 (2)」『研究紀要 8』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団

右島和夫 1992『神保下條遺跡』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団

右島和夫 2003「横穴式古墳の構築過程を調査する」『古墳構築の復元的研究』雄山閣

茂木由行 1995『吉井町遺跡地図』吉井町教育委員会

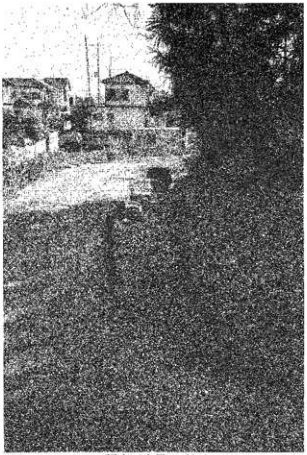
写真図版1



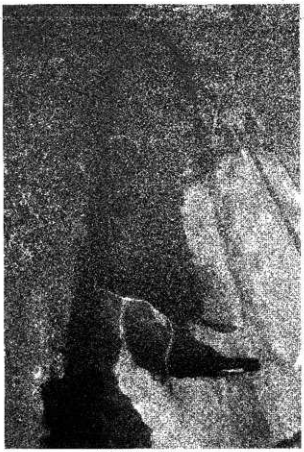
墳丘全景（西から）

墳丘全景（北から）

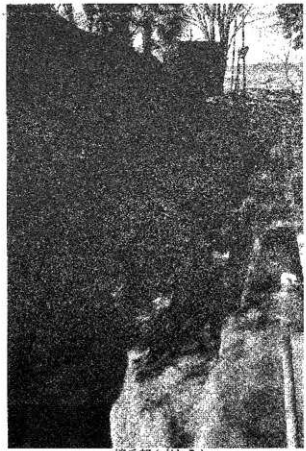
調査区全景（東から）



調査区全景（西から）

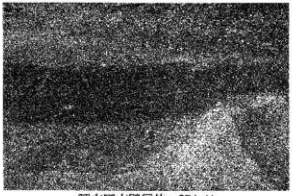


墳丘裾部（東から）



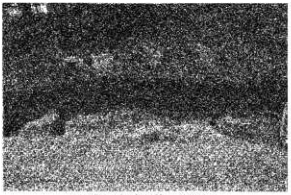
墳丘部（東から）

写真図版 3

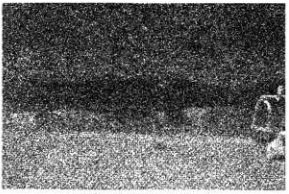


調査区南壁層位　SPA-A'
（北から　Y=-75942 付近）

調査区南壁層位　SPA-A'
（北から　Y=-75944 から -75945 付近）



調査区南壁層位　SPA-A'
（北から　Y=-75945 から -75948 付近）

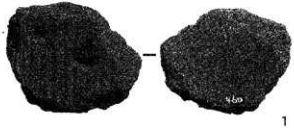


調査区南壁層位　SPA-A'
（北から　Y=-75948 から -75953 付近）

調査区南壁層位　SPA-A'
（北から　Y=-75953 から墳丘西端）

調査区中央部層位　SPC-C'（西から）

遺物写真



1

2

報告書抄録

ふりがな	よしいかわせんげんづかこふん
書名	吉井川浅間塚古墳
副書名	市道吉井9297号他1線道路改良工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第262集
編著者名	滝沢　匡
編集機関	高崎市教育委員会
所在	〒370-8501　群馬県高崎市高松町35番地1
発行年月日	平成22年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
吉井川浅間塚古墳（よしいかわせんげんづかこふん）	群馬県高崎市吉井町吉井川字浅間塚616-2、618（ぐんまけんたかさきしよしいまちよしいかわあざせんげんづか）	102020	460	36° 15′ 1″	138° 59′ 17″	20091201 ～ 20091211	396㎡	道路拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉井川浅間塚古墳	古墳	古墳時代	土坑	埴輪片	

高崎市文化財調査報告書第 262 集

吉井川浅間塚古墳

市道吉井 9297 号他 1 線道路改良工事に伴う発掘調査報告書

印刷・発行日　平成 22 年 3 月 31 日
編集・発行　高崎市教育委員会
群馬県高崎市高松町 35 番地 1
印刷　野島印刷株式会社